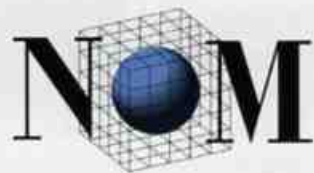


新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第9号

1997.10

研究室より 佐渡の島影—中村木子ノート—

—「戦後の書・その一変相 江口草玄」補遺—

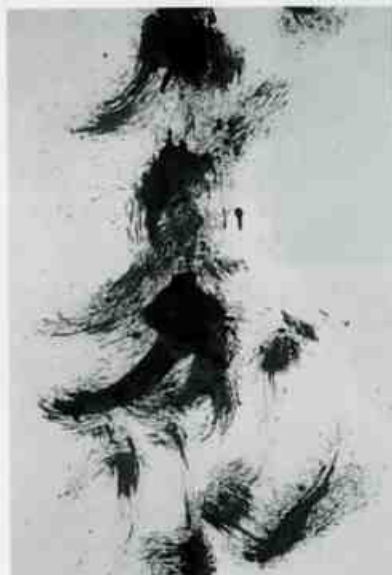
昨年開催した「戦後の書・その一変相 江口草玄」の為、一昨年草玄と共に佐渡出身のもう一人の書家中村木子を追った。しかし、意中の作品を発見できず、同展では3点の展示に止まった。これはその果たせなかった木子についての記録である。

佐渡の言葉で「頑固者」を「モッコ」と言い、木子という号はその当字である。戦後、1947年頃から使っている。彼の記述から戦前より鳴鶴流や翠軒流を学び、香山、翠江、翠々庵と号していたことはわかるが、木子たるものは、戦後の書の革新運動の中での姿であろう。

墨人会の創立同人でありながら、その活動は短命だった。稼業(水産物加工業)の経営の為、創立5年後の57年には断念せざるを得ず、64年以降は名簿上からも名が消えている。一時期復帰を試みているが続かず、亡くなる半年前(72年初冬)に富山県民会館での個展が最後となった。

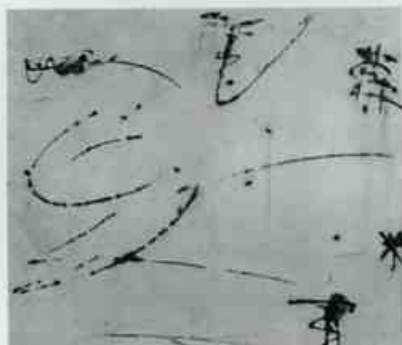
木子は生前、長男絃一氏に「会社が本業で、書は趣味だ」と語っていたそうだが、真意は単なる趣味として割切れるものではなかったであろう。調査中拝見した数々の写真、書簡などの遺品はそれを物語っていた。僅か5年余りの時が、木子が疾走した時期と言えよう。

《作品》は発見できた作品の1つで



《作品》1956年頃

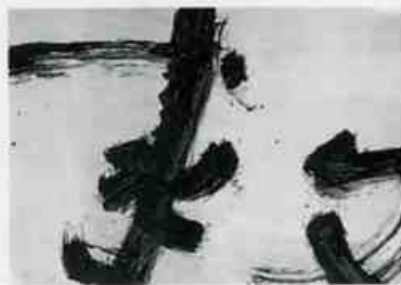
ある。若干構図の違う作品が56年の墨人展に出品されている。剛毛の筆さばきの跡が非形象を織り成し、黒と白を共鳴させようとしている。出品作の方が布置等確かであるが、本作もこの時期の傾向を示すものである。翌年早々に墨人会を離脱しており、模索半ばでの最も方向づいた頃の作風と言えよう。当時井上有一もストロークによるエナメルのように書いているが、木子の場合ストロークではなく、筆触、毛と紙との摩擦、抵抗感が作る綾模様であったと言えないだろうか。



《作品C》制作年不明

佐渡時代交友の深かった神蔵翠甫氏に「ミロを意識し好んでいた」と伺った。事実木子のこの時期の作品は、形態的にミロ風な細い線によるユーモアのある形態の作品を図版等で確認できる。また神蔵氏は超長鋒の鋒先を焼いた筆を使い飛白のような線をよく引くところを(こうした飛白を用いていたのは桑鳩師事時から墨人の早い時期であろうが)目撃しており、この点からも筆触、筆線の変化による作品を追求していたと見てよからう。発見できた《作品C》は、まだミロの影が表立つ作品であり、《作品》に至る早い頃の作と推定できる。

この2作は当時唱われた国際的普遍性を求めた海外との交流を反映しており、海外画家の動向を注視した中から生まれている。けれども3点目の《救》は珍しい作品である。散見するところでは、水溶性ボンドを混入した墨の使用は60年頃からであり、こうした一字書による作品の紹介を



《救》制作年不明

これまで見たことがなかった。離脱後の作であろうながら意志的筆意が満ち、情熱の火は消えていなかったことが窺われる作である。

「人間的な抵抗も、抵抗の運動も、又抵抗への情熱」を以て革新していくのが、前衛書家の立場であり、既に具象されたスタイルを盲従するのでは前衛の名折れであると言いつつ木子の情熱を注いだ姿がこれらの作品であった。

しかし、絶えずその前には本業の経営が立ちだかり62年佐渡を離れる。そして転居後しばらくは筆を持たず、また73年4月に亡くなるまで佐渡に渡ることはなかったという。



《佐渡山の早稲みしかがな夢続く 志同なつ可しき色紙の墨影》
* (72) とあるが、(72) の墨に影が映る。

72年頃の制作と思われるこの色紙は、木子の心中が投影されているように見える。佐渡への郷愁は、思い半ばにして断つこととなった全て(稼業であり、書であり、ここには書かなかった政治活動等)に連なり、木子が戦後、駆け抜けた姿に重なって見える。しかし、最後の個展の頃の作品には、50年代の熱のような面影は既に薄くなり、落ち着いた静寂が見えるようである。

モッコが見た夢の一端をここに止め、果たせなかった展覧会を補うものとした。

(美術学芸員 松矢国憲)

中村彝と洲崎義郎と越後柏崎

中村彝展〔11/1(土)～12/14(日)〕によせて

「何故、新潟の美術館で中村彝の展覧会をやるのですか」と事情通の人によく聞かれた。彝の郷里でもないのにということだろうか。また、作品の借用をお願いした美術館の担当者からも「何か新潟の美術館で中村彝の展覧会をやる明かな理由があると貸出しやすいですが」と言われたこともある。こうしたお尋ねは故人、現存を問わず地元出身でない作家の回顧展を企画したことのある地方美術館員なら誰もが経験しているに違いない。

今回の展覧会のきっかけは数年前に、今から77年前の大正9年11月に越後柏崎町で開催された中村彝の展覧会のため作られた小さな出品目録(図版1)を手に入れたことに遡る。それ以前から、この展覧会が彝の初の個展であったというくらいの知識はもっていたが、どうして東京でも出身地の水戸でもなく柏崎だったのか、開催の経緯などを詳しく調べていた訳ではなかった。



図版1 大正9年11月中村彝氏個人展覧会目録

さて、展覧会でも参考に展示しようと思っているが、タテ6.4cmヨコ7cmの出品目録はなかなかおしゃれで、赤い糸で綴じられている。表紙の1920年という年記も時代を考えるとモダンである。全体で14ページ、彝の肖像と四葉の作品図版が載っている。そして新品のように新しい。この目録を手にした時、よくぞ残っていたものだと正直驚いた。一方、歴史の彼方の幻のように思っていた展覧会が急に身近なものに思えてきたことも確かである。一片の資料の語り掛ける意味は受手しだいで大きくも小さくもなる。その後、ある柏崎の集まりで美術について話すよう頼まれた時、躊躇なくこの展覧会のことをテーマしようと思ひ彝と柏崎のことを調べはじめた。

洲崎義郎(すのぎき・ぎろう)という柏崎比角村の素封家に生まれ、進歩的で芸術愛好家の青年がいた。大正3年の晩秋の一日だと思う。洲崎は同郷で当時一高生だった小熊虎之助に案内されて新宿中村屋裏のアトリエに寄寓していた中村彝を訪れた。彝と小熊は日暮里本行寺で



図版2 大正9年11月中村彝氏個人展覧会会場(柏崎町役場)

催されていた岡田虎二郎の静座会での仲間で、親しく交際しており、その後も彝の生涯の周辺を彩る中心的存在であり続けた人である。小熊は洲崎の芸術愛好熱を知って彝訪問を促しての同道だったと思われる。この時、彝は27歳、宿痼の結核と中村屋の長女相馬俊子との恋愛をめぐり、俊子の両親愛蔵、黒光夫妻との確執に苦しんでいた。洲崎、小熊はともに26歳。若い三人の間でどのような話が交わされたか今では知る術がない。ただ、この会見は洲崎義郎に名状しがたい強烈な印象を与えたい。のちにこの出会いを回想して「私の心の中に若い謙虚な人好きのする芸術家らしい彝さんの深い印象が色濃く印された。初対面で百年の知己のように共鳴し生涯の友となった」と述べているからである。洲崎を仲立ちに彝と柏崎の縁はこの会見から結ばれたといってもいいだろう。そして特に、彝と洲崎の間には懇ろなつきあいが始まり、精神的血縁とでも呼びたい濃密な関係が生まれていったことが残されている彝の洲崎宛の書簡から窺える。

洲崎は天涯孤独の身であった彝に対し、大正13年の死まで作品購入はもとより物心両面に惜しみない援助をつづけた。ある時は彝が欲しがっていた高価な「セザンヌ画集」を贈って「驚いて終った。全く驚いて終った。セザンヌ!!今が今までセザンヌが来ようなどは夢にも思はなかった(後略)」(大正5年3月9日付洲崎宛書簡)と感激させる。下落合のアトリエ新築資金を提供、大正8年の茨城平磯海岸への転地療養も洲崎の援助があり実現した。もちろん、山海の味覚は恒常的に送られ、それに対する彝の礼状は枚挙にいとまが無い。特に彝は柏崎の味噌が気に入ったようで、おねだりもし、「待ちに待った味噌が今日届きました」(大正12年12月28日付洲崎宛書簡)と素直に喜びを伝えている。彝の洲崎宛書簡を見ると、彼の食生活には柏崎から送られた味噌が不可欠なものであったことがわかる。

洲崎はモデルも務めた。大正5年2月、葬は洲崎の顔の構造が「まるでエジプト彫刻のようだ」から面白い絵ができそうだと肖像画の制作を意図するが病気で果たせず、実際に着手したのは大正8年11月下旬で20日間かけて完成させた。現在、当館展示室2に常陳されており本号の表紙を飾った《洲崎義郎氏の肖像》である。

ところで制作中、洲崎の仲介で普段は入れないアトリエに入れてもらい、悉さに葬の制作ぶりに触れた幸運な青年がいた。柏崎出身で画家志望の鬼山米吉である。彼はこの体験を生涯の宝としたが、後に画家を断念、柏崎でペンキ屋を開業した。

柏崎ではもう一人故人だが、洲崎の紹介で写真で「モデル」になった人がいた。柏崎町長も務めた西巻時太郎である。大正6年に制作された。今回の展覧会にも出品される。

ところで、洲崎が葬から購入した作品は20点とも30点ともいわれるが正確にはわからない。最初に購入したのは《静物》(1913~14年)で、その後、友人で黒船館の創立者吉田正太郎に譲られた。以下、現在は各地に散逸したが洲崎の所蔵が確認できるのは《大島風景》(1914~15年・図版3)、《大島の風景》(1915年・中野美術館蔵)、《静物》(1916年・茨城県近代美術館蔵)《莓》(1917年頃)、《平磯》(1919年)、《平磯海岸》(1919年・玉川町立玉川近代美術館蔵)、《雄子の静物》(1919年・茨城県近代美術館蔵)、先に紹介した個展目録の表紙を飾った《静物》(1919年・茨城県近代美術館蔵)であり、他にパステルの《目白風景》(1919年頃)、ペン画の《小島の復活》があった。いずれも今回の展覧会に展示される予定である。

余談だが、あの《エロシェンコ氏の像》(図版4)も洲崎にコレクションされる筈だったが、今村繁三に譲られ



図版4 書画文化財 《エロシェンコ氏の像》1920年 東京国立近代美術館蔵

たいきさつがある。さらに余談だがエロシェンコは大正9年7月柏崎の友人を訪れた。三階節を口遊み、日本海の夕日に盲目ながら感動したという。

柏崎には葬の作品が沢山集まっていた。展覧会の気運が盛り上がりしても不思議はない。大正9年11月7・8日「越後タイムス」社の主催により柏崎町役場楼上で中村葬の初の個展となる「中村葬氏個人展覧会」開催の運びとなった。主催した「越後タイムス」は明治44年柏崎で創刊された同人週刊新聞で、前年、武者小路実篤らが創刊した「白樺」の影響を感じるような文化的な香の高い新聞でインテリ層を主な読者にしていた。洲崎義郎も前記の吉田正太郎も同人で健筆を揮っていた。

展覧会では油絵21点、パステル4点、ペン画2点が展示された。確証はないが東京から作品が送られた形跡がなく、すべて柏崎の所蔵家のものと思われる。

街にはポスターが貼られ、「越後タイムス」も紙面の多くを割いて展覧会の意義を伝え、中村葬も11月7日の紙面に「私の感想」を寄稿した。会場では目録が配られ、洲崎と何故か曾宮一念が作品解説を担当。出口には感想を記すノートも用意されていた。さらに「越後タイムス」(大正9年11月14日)の記事によれば「八日も快晴だったので(中略)午後各学校の放課時間になると、生徒の數団がみんな一度に押し掛けて来た。之れは洲崎義郎氏が前以て女學校中學校等に於て、中村葬氏の洋畫に就て講演を行った其の宣傳の力が確かに興つて力のあつた事だろうと思はれる」と用意周到である。まるで、今日の美術館を先取りするような運営がなされていた。主催者、特に洲崎の創意だろう。今回の展覧会ではこの個展に出品された作品の内、何とか油彩11点、ペン画1点を展示できることになった。

77年前の柏崎の個展には二日間の会期にも拘わらず県内各地から数千人の入場者があったと「越後タイムス」は伝えている。当館の「中村葬展」も是非そのひそみにならないものである。

(学芸係長 小見秀男)



図版3 《大島風景》 1914~15年

1900年（明治33） 巴里・東京・新潟 近代日本画への模索と展開展

明治30年代は、近代日本画が成立する過程の中で重要な位置を占めていました。明治維新以後、西洋文明との交流のもとで幾たびかの変化を繰り返した日本の美術界は、明治30年前後に新たな変容を遂げました。明治22年に開校された東京美術学校の卒業生が活動を始めたり、青年画家たちによって「日本青年絵画協会」や「日本絵画協会」が結成されたりするなかで、明治31年岡倉天心、橋本雅邦、横山大観らによって「日本美術院」が創立されました。また、時を前後して大小の団体が多く設立されたり展覧会や研究会が開かれ、新しい日本画の創造を求めて様々な試行錯誤が行われ始めました。

特に明治33年は19世紀の世紀末にあたりますが、パリでは「巴里万国博覧会」が開催され、海を渡って日本の美術品が出品されました。この時京都の竹内栖鳳が巴里万国博覧会の視察を兼ねて欧州遊学に旅立ちましたが、この時の見聞や経験が円山四条派と西洋絵画を融合した新しい日本画を創造する大事な契機となり、京都画壇に大きな影響を与えることになりました。



横山大観（ Landscape ） 1899年（明治32） 敦井美術館蔵



橋本雅邦（虎） 1900年（明治33） 宮内庁三の丸西蔵蔵

東京では日本絵画協会と日本美術院が「第8回日本絵画協会・第3回日本美術院連合絵画共進会」を開催した際、展覧会に出品された大観や春草らの新画風を展開した作品に対して「朦朧体」という言葉が使われました。また、この頃は西洋美術を摂取して表現を追求するため新しい形態の作品を発表する画家たちも多くなり、新旧の画風が入り交じった過渡期の様相を呈し始めています。

新潟では日本美術院の巡回展として「新潟絵画展覧会」が10月12日から新潟県議会議事堂（現在の新潟県政記念館・重要文化財）で開催され、日本美術院の橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山、寺崎廣業などの作品を始めとして、新派・旧派などに色分けされることなく当時全国各地で活躍していた画家たちの作品が数多く出品されました。この展覧会は岡倉天心と千頭新潟県知事の親交が深かったことにより新潟市での開催が決まったようです。「新潟絵画展覧会」の開催に先立つ9月8日には岡倉天心が新潟市に来港し、地元の行形亭において開かれた懇親会の席上美術講話を行い、列席者に展覧会開催についてのお願いをしています。この時の懇親会の発起者には当時の新潟市長の八木朋直、前新潟市長の鈴木長蔵や県会議長の坂口仁一郎などの名前が見えますが、千頭県知事は奇しくも懇親会の当日鹿児島県知

事に転任の叙任を受け、新潟絵画展覧会を見ることはできませんでした。

この展覧会は地元出身の画家長井一禾の世話によって行われたもので、新潟で行われた全国規模の公募展としては初めてのものであったと思われます。一週間の会期で入場者は凡そ六千余名、出品点数は凡そ七百点、このうち売約された作品の金額が凡そ六百円、また開催にあたっての賛助会員は六十七名、集まった賛助金は千六百七十円にのぼっています。この時、賛助会員には金額に応じて出品された日本美術院の正員やその他の人の作品を抽選して配布しており、売買されたものを含めると約二千三百円分にあたる日本画が新潟の地に残されたこととなります。

翌34年8月には新潟市を会場として、一府十一県連合共進会が開催されました。このとき前年の展覧会の成功もあったと思われますが、再び第2回新潟絵画展覧会が会期を同じくして開催されています。

この度の展覧会は明治33年の時代に焦点をあて、三つの展覧会に出品された作品と出品した画家のたちの作品を展示することによって、当時の近代日本画がどのように成立していったかその過程の様相と、画家たちがどのように模索し新しい日本画を制作していったかを明らかにしようとするものです。

（普及係長 横山秀樹）

平成9年度 10月～3月の催し

企画展関連事業

「1900年（明治33）巴里・東京・新潟 近代日本画への模索と展開」展（～10月12日（日））

※会期中毎週土曜日午後2時より、展覧会場にて担当学芸員による作品解説会を行います。

「一大正の美と心— 中村彝展」〔11月1日（土）～12月14日（日）〕

■講演会

11月22日（土） 午後2時より 講堂にて 聴講無料

講師 浅野 徹 氏（愛知県美術館長）

演題 「中村彝の芸術」

■美術講座

11月29日（土） 午後2時より 講堂にて 聴講無料

講師 小見 秀男（当館学芸係長）

演題 「中村彝・洲崎義郎・柏崎」

※会期中毎週水曜日午後2時より、展覧会場にて担当学芸員による作品鑑賞会を行います。

美術鑑賞講座 午後2時より 講堂にて 聴講無料

- 第2回 1月24日（土） 講師 平石 昌子（当館美術学芸員）
第3回 2月7日（土） 講師 桐原 浩（当館美術学芸員）
第4回 2月21日（土） 当館外の専門家による美術講座
第5回 3月7日（土） 講師 松矢 国憲（当館美術学芸員）
第6回 3月15日（土） 講師 宮崎 俊英（当館美術学芸員）



第1回講座風景：8月23日出

映画鑑賞会 講堂にて 入場無料

第4回 「名作!!」

1月10日（土） 午前11時より／午後2時より

《市民ケーン》1941

制作・監督・脚本：オーソン・ウェルズ／脚本：ハーマン・マンキーウィッツ／

撮影：グレッグ・トーランド／音楽：バーナード・ハーマン／

出演：オーソン・ウェルズ／ジョセフ・コットン／ドロシー・カミングー／アラン・ラッド

第5回 「巨匠の名画」

2月14日（土） 午前11時より

《人情紙風船》1937 前進座＝P.C.L.

監督：山中貞夫／原作・脚本：三村伸太郎／撮影：三村明／音楽：太田忠／

出演：中村翫右衛門／河原崎長十郎／山岸しづ江／霧立のぼる／中村鶴三／市川楽三郎

2月14日（土） 午後2時より

《浮雲》1955 東宝

制作：藤本真澄／監督：成瀬巳喜男／原作：林芙美子／脚本：水木洋子／撮影：玉井正夫／美術：中古智／

音楽：斉藤一郎／出演：高村秀子／森雅之／岡田茉莉子／山形勲／中北千枝子／加藤大介

第6回 「親子で楽しむ映画」

3月14日（土） 午前11時より／午後2時より

ミュージアムコンサート

水野淳子ピアノリサイタル

11月8日（土） 午後2時より 講堂にて 入場無料（整理券が必要です）

音楽鑑賞講座

12月～3月の土曜日（月1回）に開講する予定です。詳しくは学芸課普及係にお問い合わせください。（TEL 0258-28-4113）

講師：前川誠郎（新潟県立近代美術館長） 午後2時より 講堂にて 聴講無料

野外彫刻と語らう — 屋上庭園から (3)

中岡慎太郎 《FANTASY》



信濃川の土手、桜づつみのテラス間近に、ずんぐりとした人の形をしたこの作品は立っています。一見すると薄い板状の石を積み重ねて作られたように見えますが、実は黒御影石の塊にダイヤモンドカッターで溝を刻んだものです。カッターで刻まれた溝と、その間の石の割れ肌によってできた形は、遠目には長い時間をかけて積もった堆積岩が風化して自然に偶然にできた形のようにも見えます。素朴で大らかでどこかユーモラスなこの“一つ目小僧”は、見ていると心が和んできます。そこには作者中岡慎太郎の人柄も反映されているでしょう。

現代の便利な楽しい都市生活にあって、どこか感覚が鈍っていくような危機感を抱く中岡は、幾億年という大きな時間の流れの中で廻っている大地や自然に思いを馳せます。そして地球の細胞の一部である石を使って、私達に人間や自然や生命のメッセージを送り続けているのです。

晴れた休日の昼下がり、緑に囲まれた屋上庭園を散歩してみましよう。鳥の声や風が渡る音に耳を傾けながらこの作品と向かい、自分を取り戻す時間を持ってみてはどうでしょうか。

表紙作品解説 中村 彝 《洲崎義郎氏の肖像》

モデルの洲崎義郎は、昭和20年代中頃から柏崎市長を二期務めた人物ですが、また縁あって中村彝との深い交わりを持った人物として大正の美術史に記録されてもいます。彼は彝との出会いを「初対面で百年の知己のように共鳴し生涯の友となった」と回想しています。

洲崎は天涯孤獨の身であった彝に対し、作品の購入をはじめ惜しみな

い援助を続けました。彝の初の個展も彼の尽力で柏崎で開催されました。

この作品は、洲崎の顔の構造が「まるでエジプト彫刻のようだから面白い絵ができそうだ」と肖像画の制作を意図したもので、これも柏崎での初個展の会場に展示されました。堅固な空間構成とめりはりのある筆捌きによって、壮年の意気と生気を見事に描いた秀作です。



1919年(大正8)油彩、キャンバス、83.0×64.0

美術館友の会からのお知らせ

◎会員募集

新潟県立近代美術館友の会は美術を愛する人の会です。鑑賞会や研修会、会報発行などの活動を通じて会員相互の親睦を深め、美術館の活動や運営に協力します。常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引などの特典があります。

◎これからの催し

作品鑑賞会

近代日本画への模索と展開展

9月28日(日)午後2時～

中村彝展 作品鑑賞会

11月22日(土)午前11時～

友の会作品展覧会

10月21日(火)～26日(日)

(最終日午後3時まで)

会場：2階ギャラリー

※会員のための展覧会です。この機会にご自身の趣味の作品を発表してみませんか。また会場づくり等の参加者を募集しています。

上州美術館めぐり(要申込)

10月28日(火)～29日(水)

中村彝展 開会式

10月31日(金)午後2時～

問い合わせ：0258-28-4111

友の会事務局

利用案内

■開館時間／午前9時～午後5時

■休館日／毎週月曜日

ただし祝日・振替休日の場合は翌日が休館となります。

※10月13日(月)～10月16日(木)、12月24日(木)～平成10年1月3日(土)、平成10年3月26日(木)～3月31日(火)は保守点検のため休館します。

■観覧料金／企画展観覧料

企画展によって観覧料が異なります。なお、同観覧料で、常設展もご覧いただけます。

・常設展観覧料

一般……410円(330円)

大学・高校生……200円(160円)

中学・小学生……100円(80円)

※()内は20名以上の団体料金です。

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮岡町字屋掛278-14 〒940-21

TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

美術連話(9) 「続忘暑記」

新潟県立近代美術館長 前川 誠郎

二年前の連話(5)に「忘暑記」と題して一文を書いている。今夏もすでに峠を越えた。昨年はエルミタージュ展に振り廻され、大阪展が終わった年末ころから何となく体調を壊(くず)した。それへ浦和への引越しが重なって家にいても横になって暮す日が多くなった。しかし何かせずにはいられないから毎日少しずつものを書いて過ごした。そのための下調べなど、元気なときは何でもなかったことが億劫になるばかりで閉口したが、半年ほど掛かって音楽論一篇を書いた。

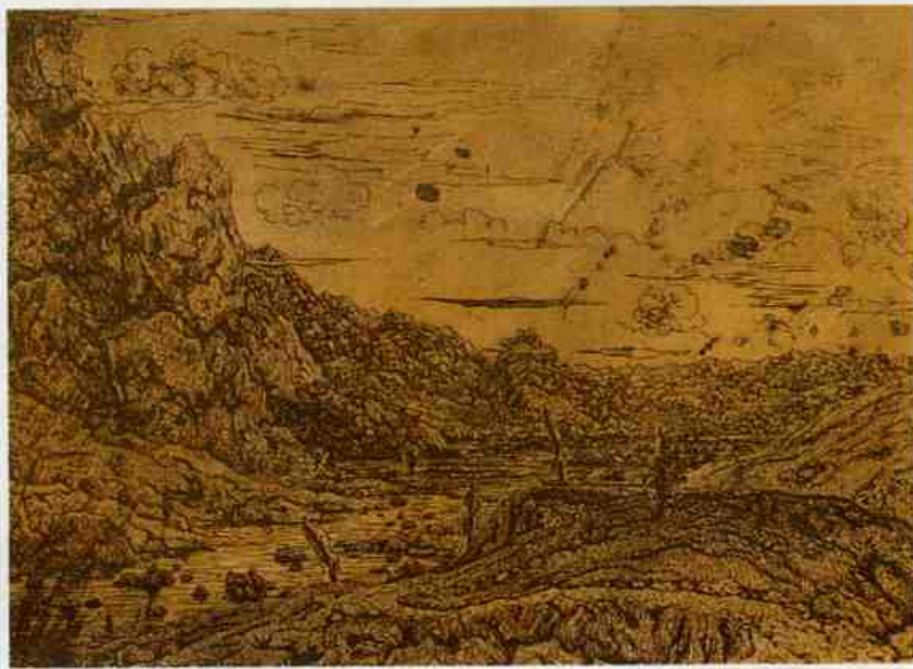
西洋音楽史はバロックとかクラシックとか美術史上の概念を借用して組立られている。しかしそれらの言葉の使い方はあるときは時代を、あるときは様式を意味し、美術史家の私からみると甚だ奇妙に思われることが多い。そのことを書いたのが今度の音楽論である。クラシックやバロックの語を様式概念として用いる限り、バロックとはクラシックの発展的解消段階を意味するから、それがクラシックの先きに来る筈はない。音楽史でその順序が逆になっているのは、バロック音楽が美術史上のバロック期(17、8世紀)の音楽という意味であるのに、他方クラシック音楽とは整備された書法に基く規範的な音楽のことで、その際にはクラシックの語を様式概念として使っているからである。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンらの音楽が本当にクラシック芸術であるのなら、いずれはその整然たる形式が壊(くず)れて肥大化したバロック的發展が来たるべきものである。私はそれを、一般に後期ロマン派と呼ばれているリストやヴァーグナー以後のドイツ音楽に認めるのである。これが私の音楽論の概念である。

この夏のもう一つの出来事はヘルクーレス・セーヘルズという17

世紀前半のオランダの画家との改めての出会いであった。今春の「西洋美術館展」にセーヘルズ/レンブラント作として《エジプト逃避》のエッチングが出ていたのを覚えている人もあろう。セーヘルズの死後にその《トビアスと大天使》の銅板を入手したレンブラントが右半を改作した珍しい作品である。私はそれを西美在任中に購入して以来この画家に関心を懐(いだ)いてきた。それからもう十四、五年経った近頃になって彼に関する基本的文献の殆ど全てが手許に揃った。彼の作品は油彩画を別にしてエッチングが五十四点知られているが、その多くは僅か一、二枚の刷りしか残っていないので、アムステルダムやロンドン、またはサント・ペテルスブルグかドレスデン等の美術館へ行って特に見せて貰う以外にオリジナルへ近付く手が無い。従ってこの画家に関してはファクシミリが極めて重要になる。それにはヤーロー・シュブリンガー本(1910-12,ベルリン)とハーフェルカンプ=ペーヘマン本(1973,デン・ハーク)の二つがあって今日では何れもすでに稀覯(きこう)

に属する。

しかし何という不思議な芸術家であったことか。作品の殆どは荒涼とした山嶽や峡谷の空想境を描いたものである。ここに掲げる《四本の木のみえる山地》(HB 4, Sp28)は三版ある中の第一ステートでベルリンに在るもの。明褐色の地紙に黒インクで刷っている。その法量は231×316mmで版画としては大判に入る。ところがロンドンの同じ第一ステートは白紙に刷ったものであるが287×471mmと一週り大きくなっている。何故そうなったかと言うと銅板の左右上下に図柄を彫り足したからである。(ステートの番号を変えるべきではあるまいか?)つまり銅板に十分な余白を持たせて仕事をしているわけで、それがドレスデンに在る第二ステートでは149×235mmへと大幅に切り縮められている。このような作例は他にそうあるものではない。買手もないまま籠へ作品を一杯つめてバター屋へ包装紙として売りに行ったなどという作り話も出来た。今夏はそのセーヘルズとともに音楽を聴いて過ごしたのであった。



ヘルクーレス・セーヘルズ 《四本の木のみえる山地》